郷土室だより

第115号
平成15年2月1日
編集・発行
中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電 話 3543－9025
刊行物登録番号 14-037

「続」中央区の"橋"（その15）

◇開府四百年

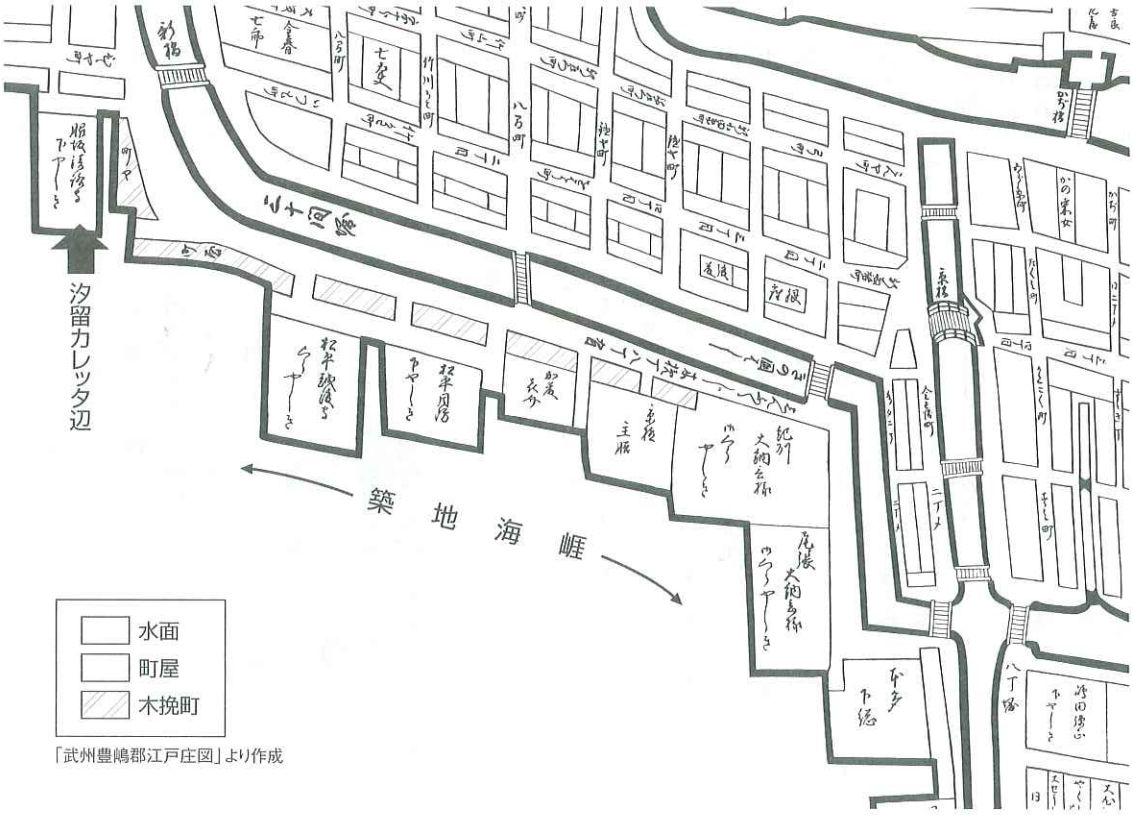
東京の日刊各紙は、いい合わせたように平成十五年の元日の紙面で《開府四百年》にちなんだ特集を組んでいます。開府当時の情報が乏しいため、というより、当時の正確な情報を読んで調べるという根気のない人々が、時間に追われて主に幕末の出来事や文物を中心に、その繁栄振りを取り上げているのも、平成大不況最中のお正月らしい状況です。

しかし、この『郷土室だより』は相変わらずのテンポで、中央区を中心とした地域の「橋」を中心に、いよいよこの号から埋立地の部分を取り上げていく予定にしています。

◇三十間堀川の東岸

前号（一一四号）の表紙の図のほぼ中央に三十間堀川がありますが、その西岸の線が徳川家康が江戸入りをした当時の海岸線であることは、これまでに繰り返し述べてきたことです。

開府四百年に関係付けると、三十間堀



「武州豊嶋郡江戸庄図」より作成

川の東岸に図のような木挽町一～七丁目が出来るのは、慶長八（一六〇三）年の幕府開設から約九年後の慶長十七（一六一二）年以後の事でした。

というのは、前に見たように江戸前島の東岸（後の楓川沿岸）から一〇本の舟入堀を掘り築城用の石や材木を荷揚げしました。石の方はすぐに石垣建設予定地に運ばれていったのですが、材木の方は楓川西岸に並んだ北から材木町一丁目（現在の江戸橋の所）から南は京橋川の所の八丁目までの「町」がいったん荷受をしました。

この材木町は後に、日本橋に新材木町、神田川沿岸にも神田材木町、さらには大川を越えて深川の材木町、さらに幕府の木置き場（木場）と材木町が増えていくと、この材木町一～八丁目は本材木町一～八丁目と呼ばれるようになり昭和初期までその町名は存続しています。現在の町名では旧本材木町一～四丁目は日本橋一～三丁目の東部、五～八丁目は京橋一～三丁目の東部に相当します。

この本材木町五丁目の西隣に大鋸町（現在の中央区京橋一丁目11辺）という町がありました。大鋸町についてはこのシリーズの前の『郷土室だより』の第九四号（平成八年十二月発行）の「槇町」の項で取り上げています。といって済ませるのは不親切ですから、その部分を再掲しましょう。

（前略）南槇町に続く大鋸町は真木を縦引きの鋸で製材する業者、または縦引きの鋸を商った町といえましょう。縦引き鋸とは材木の梢から根元の方に、つまり長手に引き割るもので、切断面は柾目になります（鋸の歯が粗い板挽き用）。

対する横引き鋸は樹木を輪切りにする鋸で、切断面には樹木の年輪が現れます。（後略）

◇木挽町

このように書きましたが大鋸町の主流はやはり鋸の製造修理販売業が集まった町だったと考えられます。それでないとこれから取り上げる七町目にも及ぶ木挽町という職人町の集団の居住地についての説明がつかなくなるからです。

木挽町とは前号の図で見たように三十間堀川の東岸一帯の江戸で一番始めに埋め立てられた場所に成立しました。これを現在の地名（町丁名・地番）でいうと、おおむね昭和通りに沿った西側のラインで、銀座一丁目13、二丁目10、三丁目9、四丁目9、五丁目11、六丁目13、七丁目12、八丁目12番辺りを連ねる南北に細長い町だという事になります。（表紙図参照）

言い方を変えると江戸橋～京橋間に細長く続いた本材木町のすぐ南側に続く町が木挽町だったのです。今でもこの付近には「木挽町」は歌舞伎座の代名詞だったことも含めて「木挽町」を付けたビルや企業名がかなり残っています。

木挽きというのは樵によって伐採された樹木をその種類に応じた用途にするため、適当な大きさに製材する仕事およびその職人のことです。適当といっても橋梁の部材と家屋の部材・建具の材料といった用途によって当然規格も異なり、長さ・幅なども違ってきます。板材の場合の事は前出の「槇町」の項の中で説明してあるように、かなり「流れ作業」的というか一連性のある分業があったことが推察されますが、木挽きの方は余り細かい事は判っていません。

しかし物流の面から材木町と木挽町の位置を確認しますと、遠隔地の尾張や紀州などの木材産地から運ばれてきた原木を材木町で受けとって、それを隣接した木挽町に運んで製材させて、築城資材に廻したとしたら、開府直後の江戸の都市計画はかなり《現代的》だったともいえます。モノの輸送とその加工と消費の流れに無駄がなかったのです。

注　なお最近のことですが江戸近郊にも材木供給地があったことが判りました。今の荒川上流入間川のさらに上流部の埼玉県飯能市・東京都青梅市の一部に掛かる地域が「赤山」と呼ばれた材木産地で、「近世初期から製材した材木」を筏によって江戸に出荷したという記録があります。つまり樵と木挽きが並存していた地域だったということです。

◇木挽きの風景

木挽きの使う鋸は大鋸が主で、

博物館などでよく見られる二人引きの形式の鋸は歯をつけた鋼の部分を、弓の弦のように張ってその弓の部分（枠）を持って押し・引きする鋸です。さらにいかにも大鋸という形容にふさわしい形の鋸もあります。

その一例を有名な版画で見ると、葛飾北斎の『富嶽三十六景 遠江山中』では一本の巨大な角材から、さらに板材を切り出している風景が描かれています。この図には三人？の木挽きがいます。一人は角材の上に乗って鋸を使い、一人はその反対側の下面から鋸を引いています。もう一人は鋸の目立てをやっています。

さきに「三人？」と疑問符を付けたのは一般の職人は自分の使う道具は自分で手入れをして使いましたが、鋸の場合は「目立て屋」という職が独立的にあって、しかもつい最近まであった事を知っていますので、北斎の版画中の一人は「目立て」の専門家だったかもしれないと考えたためにあえて「三人？」としたのです。

北斎にはこの『富嶽三十六景 遠江山中』と殆ど同じ絵柄のものがあります。それは『百人一首うばがゑとき 春道列樹』です。『富嶽三十六景』が西村屋与八版・天保二（一八三一）年頃、『百人一首』は伊勢屋三次郎版・天保六～七（一八三五～六）年頃の作品といわれていて、この二枚の版画で見る限り木挽きの仕事風景は北斎の得意な構図のようです。

しかし注意しなければならないのは図中の人物・大鋸は実物大に描かれていますが、この巨大な角材をどのようにして据えたのか、今なら動力クレーンで簡単に出来そうですがそうしたものが一切なかった当時としたら、この巨木に木挽きが取り付いて作業するまでの手順が明らかでないと北斎独自の虚構の罠にはまってしまう恐れもあります。

◇消えた木挽きたち

北斎の二枚の木挽き図の舞台は《開府二百年》当時の、江戸ではない場所での木挽き風景です。それらの木挽きの先祖は、あるいは前に述べたように江戸に木挽町を一～七丁目も続く大きな規模の職人町を造っていたかもしれません。

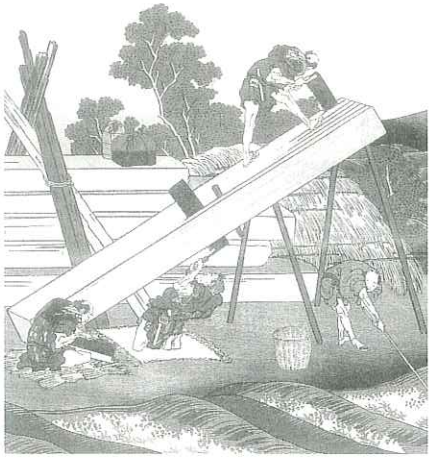
しかし、江戸築城が一段落すると職人たちは何時までもそこに留まる必要がなくなるわけで、仕事の需要のある場所を求めて全国に散っていったものと推定されます。

高度の技術を伴なう木挽きは同時に「木挽きの一升飯」つまり普通の人の倍は飯を食わないと仕事が出来ない力仕事でもありました。その点でもこの大食いの職人集団が江戸の海岸の埋立て地に、木挽きの仕事がないまま定住する意味もなかったのです。

これまでにも江戸の町名について、機会あるごとに説明してきましたが、ここで当時の「町」に関する幕府の行政上の方針について整理してみますと、職人町・商人町の区別なく、いったん「町」という株を認めると、その「町株」の実態がすっかり入れ替わるような変化をしても、もとの「町」の名称と「町役」（その町固有の税負担）はそのまま残して新しい町民に「町」の運営を任せています。

確かに江戸初期にはいろいろな職人が一つの「町」に集められて、例えば鍛冶町・鉄炮町といった町にはその職人が住んで実際に作業をしていた時期もありましたが、木挽きの例に見たように、その作業を永続させる必要がなくなるとそれまでの「○○町」という名と負担割合だけを残しました。神田鍛冶町が幕末になると下駄屋が軒を並べる町になったような変化は、ごく一般的な現象だったのです。

このような事情は現代都市の内



葛飾北斎画
「百人一首うばがゑとき」の一部

部の事情に通じる事でもあります。いわゆる中心市街地が流通事情と交通手段の変化の結果として衰退したため、「中心市街地活性化法」といった法律が必要になり、それでも足りなくて全国の「街づくり」関係者が苦労し続けている現実があるのですが、今から約四百年前には幕府は「町」を現在の表現でいうと《証券化》させて固定的だった町民の流動化、さしずめ今の言葉で言えばベンチャー企業の導入を制度として計画・実施して、町を活性化しているのです。

◇三十間堀川の橋

話を戻しますと「本土」（江戸前島）側から三十間堀川の対岸になった木挽町の「町」の列の間をつなぐには、当然の事ですが橋が必要になります。その最初の橋は紀の国橋でした。この橋は『郷土室だより』第一一三号の表紙に掲載した地図の下端中央に見えます。ほぼ現在の銀座一丁目10と銀座二丁目10を結ぶ線辺りです。

この紀の国橋は古地図（『武州豊嶋郡江戸庄図』）には「きの国はし」、（その他の地図には「紀伊国はし」・「きの国はし」などとかかれている）橋です。その名の通り「本土」側から木挽町を通り越して「紀伊大納言様の御蔵屋敷」へ行くための橋だったと推定されます。

紀伊大納言様と地図上で敬称を付けられていることもから判るように、徳川の御三家筆頭の紀伊徳川家の蔵屋敷とその東隣にはこれも御三家の一つの「尾張大納言様御くらやしき」がありましたが、多分この橋の架橋と維持管理は紀伊家が行ったことでしょう。

この二軒の大名の領地は木材の大産地だということは先にも述べた通りです。蔵屋敷とは大名直営の物揚揚と倉庫と販売組織があった場所のことです。同じような機能を持つ町人居住地区＝町地における河岸（物揚場・倉庫・いちば機能）の規模・立地条件とは比較にならないほど優遇された場所＝湊にあった所だと言い直してもよいでしょう。

これは御三家だから特別と言うよりも、江戸湊として重要な場所の殆どは有力大名の蔵屋敷だったのです。このことは案外まともに取り上げられていませんが江戸時代に非常に多く発行された「江戸図」を見れば、大川の沿岸からその河口と海岸線の殆どが、大名の蔵屋敷によって占められていたことが一目で判ることでしょう。

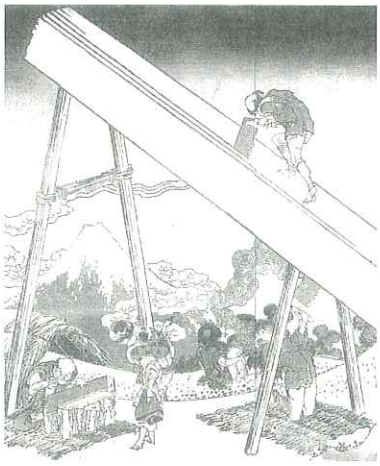
御三家と言った特別な大名に限らず、江戸城建設のために天下普請という命令で、全国から動員された大名が築城工事に従事したのですが、そのための必要人員とその宿舎・資材とその荷揚場・倉庫に使用するための港湾施設が蔵屋敷だったのです。

紀の国橋に戻るとその橋の東袂の木挽町とともに紀伊大納言様御蔵屋敷の中にも、紀伊家直属の木挽きが働いていたかもしれません。原木のまま運ばれてきた木材は木挽きによって製材されなければ、宝の持ち腐れだったのです。その製材された材木が紀の国橋を渡って江戸城の工事現場まで運ばれたことが想像されます。

さきの第一一三号の図中のEの字の下に真福寺橋という橋がありますがその別名は牛草橋だと諸書にあります。木挽きが引いた材木を山と積んだ牛車が頻繁に往来した風景を偲ばせるような橋の名です。

そして『武州豊嶋郡江戸庄図』（寛永九年＝一六三二年当時の現況図）には三十間堀川にはこの橋の他に無名端が描かれています。後に五町目橋、さらに後になると木挽橋という名の橋が架かっていただけでした。その場所は今の采女橋へ通じる道筋に架かっていた橋のことです。次号はこの「木挽橋」について詳しく取り上げる予定にしています。

（鈴木理生）



葛飾北斎画
「冨嶽三十六景　遠江山中」の一部